

# 秋保 いづてみっぺ

## ばんじ ばんざぶろう 磐司磐三郎伝説をたどる

“ばんじ”という名称の書かれ方については、「磐次」「万事」「磐神」「萬二」等、色々あります。

民俗学者の柳田国男によると、“ばんじ”という名は、最初は山の神を意味する「磐神」と呼ばれたものが、次第に人の名となり、「磐司」「萬二」等と呼ばれるようになったもので、もとは「磐神」とであると説いています。

旧秋保町が編さんした『秋保町史』においても、「磐神」という表記が使われています。

今回、磐司磐三郎の伝説をたどるにあたり、秋保の伝承では、二口峡谷の「磐司岩(国指定名勝)」がその聖地とされることから、「磐司」を用いることとしました。

また、時代背景や秋保は山寺との関わりが深い地域特性があることから、1人の人物として編集していますが、秋保の民話では「ばんじろう・ばんざぶろう」の2人の兄弟という伝承もあります。



観光PRキャラクター ばんじろう・ばんざぶろう

## いってみっぺ 秋保 磐司磐三郎伝説をたどる

企画・発行：秋保地域資源活用委員会・仙台市  
連絡先：秋保総合支所総務課(022-399-2111)  
秋保市民センター(022-399-2316)

秋保の里で語り継がれる  
磐司磐三郎伝説。  
民話や地名に残された足跡を  
たどる歩き旅。

訪れてみたい秋保  
二口街道ツアー 62

No.23

掲載されている情報は、平成31年3月現在のものです。

磐司磐三郎が生まれ住んでいたとされる上人洞  
内部は小学校のプールが丸々入るぐらいの大きな  
洞穴になっている。  
登山上級者でなければたどり着くことは厳しい  
幽谷にあり、静かに時をきざんでいる。

### 磐司磐三郎伝説

磐司磐三郎伝説とは、栃木県から秋田県まで、奥羽山脈沿いの広いエリアで昔から語り継がれている物語である。各地のストーリーに概ね共通しているのは、武勇に秀で狩猟の腕前が優れていることや、古代の東北の人々の首長または英雄であることである。  
秋保と山寺(山形市)を両端とする二口峡谷には、磐司磐三郎にちなんだ地名や旧跡が残り、実在の人物で山寺開山の祖と伝わる高僧・慈覚大師円仁と結び付けて語られていることや、最後は円仁に従い狩猟をやめ、仏教を信じることに特徴がある。

# 磐司磐三郎ゆかりの場所をたどる…秋保から山寺へ



磐司磐三郎 愛犬 まり

## 1 磐司岩【いばんじいわ】

秋保・山寺に広がる磐司磐三郎伝説の聖地、物語の中枢となっている磐司岩(国指定名勝)。雄大な自然物を神と崇め、地元では「磐神」と記し、「いばんずん」と呼ばれていました。  
ここを縄張りとしていた古代山岳狩猟民族(マタギ)の長が磐司磐三郎と伝わり、その壮観な二口山塊の景観を背景に、誇り高き勇者として語り継がれています。



## 2 石ヶ森山【いしがもりやま】



磐司磐三郎が磐司岩の頂から放った矢が、かすめたといういわれを持つ石ヶ森山。良質の石材が採れたことで知られ、伊達政宗が眠る瑞鳳殿の石棺に使われた品質と誇りを伝えています。馬場地区入口の「わかね橋」もこの山の石で作られました。専用通路はないので滝原方面からの遠望がおすすめです。

## 3 逆さ竹【さかさたけ】



秋保市民センターと秋保神社の間、「大東」バス停が目印。県道沿いの畑の真ん中に忽然と姿を現す密集した竹藪。この竹が秋保神社の祭事で使われています。

## 4 鬼屋敷【おにやしき】

二口街道を行き来する旅人に悪事を働く鬼が住んだと伝わる屋号の場所が並木地区にあり、今は親しみを込めて地元では「オニヤシキ」と称しています。



## 山寺と磐司磐三郎

山形にある山寺(立石寺)では次のように伝わる。  
昔々、慈覚大師円仁というお坊さんが、天皇の命を受け、お寺を建てるため東北を旅していた。  
そして、ここ二口の地にお寺を建て、その周りでは動物を殺すことを禁じ、聖なる土地にしようと決めた。  
そこで慈覚大師は、二口の狩師(マタギ)たちのカシラである磐司磐三郎と対面した。慈覚大師の尊い心に感動した磐司磐三郎は、狩猟をやめて仏の教えを信じ、山寺を開くお手伝いを熱心にした。  
8月上旬山寺磐司祭で奉納されるシシ踊りは、狩猟をやめたことに喜んで動物たちの踊りを再現したものと言われている。  
山寺の近くには、慈覚大師と磐司磐三郎が出会った「対面石」や、磐司磐三郎を祀った祠、お墓、さらには愛犬「まり」のお墓もある。  
山寺宝物館に残る磐司磐三郎の木像も、長い髭に中国風の衣服を着ていて、秋保の伝承とは印象が違い、面白い。



磐司磐三郎 対面石 磐司磐三郎祠

## 7 矢投げ坂(柳坂)【やなぎざか(やなぎざか)】

布教のため二口街道を西へ巡錫する円仁と遭遇した磐司磐三郎は、磐司岩下の名取川付近で、侵入者への脅しを放つも、逆に円仁の堂々とした仁徳に感化、殺生をやめると誓い、弓矢を捨てた場所と伝わっています。  
ブナ林越しに溪谷美が冴え匂配がゆるやかにキツくなる街道沿いにあり、俗に訛って「やなぎざか」とも言います。

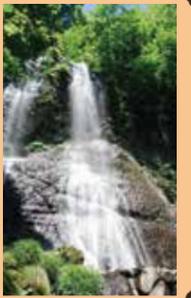
## 6 上人洞【しょうにんどう】



裏磐司の大連壁の袂にある大岩窟、磐司磐三郎が生まれ育った場所と伝わります。  
伝説でのみ知られていましたが、近年地元の言い伝えを頼りに調査、その存在が確認されました。  
大行沢と並行する登山道からアプローチするのが有効ですが、道はなく危険な岩場が連続する難所となりますので、登山上級者及び案内者を同行することが必要です。

## 5 京湊沢 梯子滝【きょうみづざわ ばしごたき】

大切な娘(のちに磐司磐三郎の母)を奥深い山中で見失った乳母が、絶望の内に身を投じたと伝わる裏磐司の名瀑、滝壺から見ると文字通り二段の「はしご」の様相を備えます。しかし、これを見るには命の危険が伴う崖下りとなるので、看板やベンチのある大行沢コース登山道から樹木越しに見ることがおすすめ。裏磐司の一望の眺めとともに見逃せない景観ポイントです。



## 磐司磐三郎の生い立ち(上人洞・梯子滝)

昔々、旅姿をした二人の女が、小東峠を越えて大行沢沿いの山道を下っていた。一人はどこのか姫君、もう一人は乳母のようであった。ずいぶん歩いたが、どうしたものか姫は突然腹痛を訴え、その場で動けなくなりました。乳母は薬を求め、来た道を引き返して村へと向かった。残された姫は横になったまま苦しんでいたが、ふと振り返ると、異様な怪人がそ

ばにいた。姫はすっかり怯えてしまい、気を失ってしまった。  
しばらくして乳母が戻った時には、姫の姿がなく、呼べど探せばどこにもいない。乳母は絶望して梯子滝に身を投げた。一方、姫が再び目をさますと、木の葉を敷いた洞窟(上人洞)にいることが分かった。怪人の正体は全身白銀の大猿であり、姫はその大猿と洞窟で暮らすようになった。のちに大猿と姫の間に生まれた子どもが、磐司磐三郎(兄弟とも伝わる)である。



## 鬼屋敷の鬼退治と石ヶ森・逆さ竹

昔々、並木の集落に鬼(悪人)が住み、旅人を屋敷に泊めれば殺生し、財貨をかすめたり人を苦しめていたという。「鬼屋敷」と呼ばれる場所がそれである。その頃、磐司磐三郎は、慈覚大師円仁の功德を受け、既に殺生をやめていたが、この鬼をこらしめ人々を助けるため、磐司岩から鬼屋敷めがけて弓矢を放った。  
しかし矢は、途中にある石ヶ森山の岩肌にかすめたため、失速して鬼屋

敷の手前の原っぱに落ちてしまった。  
それでもその鬼は磐司磐三郎の武勇に恐れをなして、並木鬼屋敷から逃亡したという。  
原っぱに刺さった矢からは、やがて根が生えて竹やぶとなり、逆さに育ったという伝承から「逆さ竹」と名付けられた。  
その後この竹は、秋保神社の祭典奉納で使われる慣わしとなり、今でも「湯立て神事」をはじめとする年中行事の重要な神具材となっている。秋保神社はのちに「勝負の神様」となり、今でも大勢の参拝客が訪れる。